

研究主題 学びをひらく：
自分らしくなっていく・子どもと教師との営み(I
総論編)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000150

I 総論編

研究主題 学 び を ひ ら く

～自分らしくなっていく 子どもと教師との営み～

子どもは、決してひとところに留まってははいない。今を精一杯生き、常に目の前の対象に働きかけ、もち味や可能性を自ら広げ続けていこうとする。これは、子どもが自分の内にある成長の芽を自ら伸ばそうとしている姿であり、私たちが大切にしている「子ども観」である。

この「子ども観」のもと私たちは、子ども自らが個性的な思考力や想像力・判断力などを発揮することや、子どもたちが追究の対象に向かって主体的、創造的に活動することを支えてきた。私たちは、追究の対象に対する自分の価値観（見方や感じ方、考え方、行い方）を子どもに押しつけるのではなく、あくまでも子どもの側に立ち、教師もひとりの人間として、子どもの表れや内面を共感的に受け止めようとしてきたのだ。この「子ども観」を大切にしていこうと深く心に刻み、私たちは日々子ども理解に努めてきている。

1. 私たちの考える「学び」について

研究主題「学びをひらく」を立ちあげてから、私たちが大切にしている「子ども観」のもと、その子の追究における「その子の論理」に注目してきた。「その子の論理」とは、その子なりの見方や感じ方、考え方、行い方などに加え、その子を突き動かす衝動や欲求、不安などである。この極めて個性的なその子の論理が追究の中で発揮されると、反発や賛同、疑問や発見、迷いや納得、憤りや喜びといった多様な姿となって表れてくる。このような姿は、その子のもち味や可能性の表出であり、私たちは「その子らしさ」として、大切にしてきた。その子の論理は、魅力のある教材や、共に追究する友達の論理に出会い、時には教師の関わりによって、一層際立っていく。自らの論理を駆使し、追究の対象に立ち向かっていく時、子どもはその子の論理を強めたり、広げたりしていく。私たちは、子どもが自らのもち味や可能性を発揮し、その子の論理を強めたり、広げたりして変容させていくことを「学び」とおさえた。子どもは、自らのもち味や可能性を授業の場だけではなく、学校生活のあらゆる場面で発揮している。私たちは、学校生活全体の中で子どもの学びを幅広くとらえようと考えた。

子どもは、知りたいという思いや挑戦してみたいという願望から自らの論理を駆使して追究の対象に立ち向かっていく。その中で、追究の対象と自分、他者と自分とを結びつけながら自らの考えをつくっていく。追究の対象や他者への働きかけを強めるごとに、自分との結びつきや自分とのずれがあらわになっていく。この時、子どもは、自分はどうしたいのか、自分の考えでいいのか、と自分の内で見つめ、追究の対象や他者との間を行き来しているのである。その時、私たちはその子の追究を追う中で、その子の様々な表れから「その子らしさ」を脈絡として結びつけることで、その子の追究を突き動かすもの（追究の軸）を探ろうとしてきた。その子の追究の軸は、教科における認知、友達関係、自己内対話の3つが複雑に編み込まれながら存在していることが徐々に明らかになってきた。友達関係と自己内対話は、情意と言い表してもいる。この追究の軸は、その子の追究の対象への立ち向かい方によって、認知の部分が強く表れたり、情意が色濃く表れたりする。たとえ情意が色濃く表れたとしても、そこには確かなその子の追究における認知があり、それがその子の情意を強く引き出しているのである。しかし、情意のない認知、認知のない情意などは存在しないし、認知や情意が独立して存在しているわけでもない。子どもは追究の過程でその子の追究における認知、友達関係、自己内対話を編み込ませながら自らの論理を発揮している。

追究の対象や友達との人間関係や自分自身の心の内に働きかけていく時、その子の論理は強まったり、広がったりしながら、その子らしくなっていく。このような過程を通して子どもは、自分自身を見つめながら、自らのもち味や可能性、すなわち生き方の幅を広げようとしている。「学び」とは論理をよりその子らしく変容させていくことであり、その子ならではの生き方の変容であると言える。

その子ならではの生き方の変容は、今ある自分の姿をもとにしながら、今の姿が本当の自分である

のかを自覚しようとしていくことである。それは、新たな自分との出会いとも言える。子どもが学ぶ時、追究の対象に自らの論理を駆使させながら、自分の生き方を絶えず模索していくことが繰り返されるのだ。

2. 副題について

昨年度、どこまでもその子ならではの学びを追い求め続けようとする私たちの決意を副題「自分らしくなっていく 子どもと教師との営み」として掲げ実践を積み重ねてきた。

社会事象における男女平等について追究していたH子さんという子どもがいる。彼女はジェンダー(男女の違い)という考えに出会い、この社会がまだまだ男性中心であるという事実をつかんだ。彼女は友達の考えと自分の考えとを重ね合わせながら、「自分ではジェンダーがいけないとわかっているけどなってしまう」「友達の言うジェンダーがなくなると平等にはならないという考えもわかる」と懸命に語りながら、誠実に自分自身と向き合っていた。さらに、「ジェンダーがなくなると平等にはならない」「その人はその人なりでいいと思うんだけど私にはそれができない」と綴っている。追究の中でH子さんは自分と事象、自分と友達との間を行き来し、葛藤しながら、不平等をなくすにはジェンダーはなくさなくてははいけないと考えていても、そうはできない自分自身と向き合っていた。彼女が見つめていたものは自らの論理であり、向き合っていたものは紛れもなく自分自身だったのである。教師は当初の構想として、彼女が思い描く理想の男女平等のあり方と厳しい現実との間で思い悩みながら、自分で何とかならないかと必死になって考えていく彼女の姿を願っていた。そんな彼女は、ジェンダーをなくさなくてははいけないと考えていてもそうはできない自分自身と真剣に向かい合っていた。必死になって考えていく彼女の姿を願っていた教師ですら、そこまで深く追究していく彼女にどう関わったらいいのか思い悩んでいた。同じ空間を共にする教師は、そんな今の彼女の姿から、自分もこの問題から逃げず、本気で彼女と共に考えていく決断をした。これは、自らのもち味や可能性を伸ばそうとしている彼女の成長の芽を信じる教師がその時にできた精一杯の関わりであった。

この実践のように子どもは、自らの論理を発揮し、今の姿が本当の自分であるのか納得を求めて追究していく。その追究の過程において、新たな事象や、自分とは違う友達の論理と出会う。自分と事象、自分と友達との間を行き来しながら、H子さんのように不安や迷い、賛同や反発といった感情をいだく。この時、「自分の考えでいいのか」と自らの論理を揺さぶり、見つめ直していく。これは、追究の対象によっても異なる。だが、その子が見つめ直しているものは自らの論理であり、自分自身を見つめることで、子どもは自らの論理を強めたり、広げたりしながらその子らしくなっていくのである。

子どもはひとところに留まってははいない。それゆえ教師は常に新鮮な目でその子をとらえ続け、その子ならではの学びを願い、関わりを模索していくことが大切だと考えた。こうした教師の「とらえ・願い・関わり」により、子どもがその子らしく追究の対象に立ち向かっていく姿を教師は支えることができる。

その子がどんな思いで活動に取り組んでいるのか、そこに友達はどう位置づいているのか、教師がとらえていくことは奥深い。その子の思いに自分が寄り添ってみなくてはとらえられないことがある。その子に近づき過ぎることで教師の考えが強く表れてしまい、その子を客観的に見るができなくなってしまうこともある。ここに教師自身が自らを見つめ直していく機会が訪れる。子どもを見る目が一面的になっていないか、自分なりの勝手な価値観の押し付けになっていないかと、子どもとの関係を思い浮かべながら今のその子を支えるためにはどうしたらいいのかを考え続けていく。それが、その子ならではの学びをより明らかにしていくことになり、次の教材につながっていくことにもなる。その子の新たな一面に出会い、その子の魅力や子どもの追究を突き動かす教材の魅力、子どもに対する自分自身の見方や感じ方の広がりなど、教師が自ら感じていくことが教師が学ぶということなのだ。こうして、教師も自分らしくなっていくのである。

このような子どもと教師が同じ空間で共に自分らしくなっていくことが、子どもと教師との「営み」であり、こうした営みを私たちは大切にしたいと考えた。子どもと共に学び続けることこそが、教師も自分らしくなっていくことであり、その子ならではの学びを支えることだという念をさらに強くした。

こうした生活を共にする目の前の子どもたちとの営みがあるからこそ、学びを構想することができ

ることを私たちは忘れてはいけない。副題「自分らしくなっていく 子どもと教師との営み」は、今後も私たちの内で変わることがない決意として、教師が子どもと共に学び続けていくことへの確かな一歩になっていくのだ。

3. 本年度の研究の方向

昨年度の実践では、その子の追究の軸となるものには、その子の内にある感情が深く関与していた。その感情をとらえた教師は、友達関係や自己内対話といった情意面に着目することが多かった。認知と情意とは別個のものとして存在しているわけではない。追究の中で、子どもたちの情意面が色濃く表れてきたとしても、そこには、追究の対象における認知があり、それがその子の情意面を強く引き出している。安易に情意面だけをとらえ、学びを構想することは、教材の価値やその子ならではの学びを見失うことにもなる。今、私たちは、その子の追究における認知と情意とを常に結びつけながら学びを構想していく必要性を痛切に感じている。

その子の追究を改めて見つめ直していくと、その子自身が自らの論理を発揮していく過程では、その子が存在する学級の空気が深く関与していることがわかる。どの追究でも明らかに共に追究する友達の存在が学びにとって重要な意味をもっているのである。昨年度の実践で、その子らしさが感じられる場面では、賛同されて自信をつけたり、反発されて自分の考えを見つめ直したり、友達の論理との絡み合いの中でその子が自分を見つめ直す姿が見られた。生活を共にする友達との追究だけに、その子の論理を突き動かす感情の揺れ動きは顕著に表れる。このような友達の論理との絡みを構想することが、学びを支える上で大切なことであり「子どもは常に、友達と共に学ぶ存在である」と言っている。そこで、本年度は、友達の論理との絡み合いによるその子の学びを探るため、実践を積み重ねていく。

また、私たちは、これまでも教師が子どもと共に学び続けることが「その子ならではの学び」を支えることだと強く主張してきた。何が子どもの学びを支えるものなのか吟味し、教師の内面を語り合うことによって、教師の内面で起きている迷いや不安やその教師ならではの子どもとのとらえや願い、関わりがより浮き彫りになってくる。今、私たちにできることは、常に自らの「とらえ・願い・関わり」を研ぎすませていくことである。それは、教師の学びを探っていくことであり、教師自身が子どもの見方を広げていくことにより、子どもの学びにかえていくことになる。

本年度は、研究の方向を昨年度に続き「その子ならではの学びを探る」とし、2つの視点(1)『友達の論理との絡みにおけるその子ならではの学びを構想する』(2)『「とらえ・願い・関わり」からその教師の内面に迫り、教師の学びを探る』からその子ならではの学びを明らかにしたい。

(1) 友達の論理との絡みにおけるその子ならではの学びを構想する

学校は、友達と共に学ぶ場である。子どもたちは友達に賛同されて自信をつけたり、反発されて自分の考えを見つめ直したりする。それだけではなくお互いに直接会話を交わさなくても、つぶやきや記されたことなどからも友達の論理にふれることで、自らの論理が揺さぶられている。その子の追究の対象への立ち向かい方も友達の論理に大きく影響される。このように自らの論理と友達の論理とが絡むことが、その子の論理を変容させる大きな要因になっている。だからこそ、学校において友達のもつ意味が大きい。

教科における認知、友達関係、自己内対話が編み込まれた自らの論理と友達の論理のぶつかり合いは、言葉や書き記したものの、何気ないしぐさに表れることがある。表面的ではないがお互いから感じることが、友達の論理との絡みを引き起こすきっかけとなり、お互いの論理に影響を及ぼすこともある。友達の論理との絡みの中では、友達に共感されて自信を強めたり、対立して自分を見つめたりすることがある。時には、友達の論理との差異に迷い、葛藤し、自分自身を見つめることで、何も言えなくなってしまうこともある。「自分と同じ所にこだわっているんだ」「何でそんなふうにししか考えられないのだろう」と共感や対立にしても、友達の身になってみたり、自分と重ねたりする。一緒に追究する友達の論理が自分の論理と絡めば絡むほど、ずれ、反発、共感、賛同が自分の内で生じ、自分というものを見つめたり、ふり返ったりしながら改めて自分の論理を見つめ直していく。自分の論理を見つめ直していく時、自分の見方や感じ方、考え方に自信やゆずれないものがある子は、友達の納得を得ようとする中で、さらに自分の論理を強めていくこともある。時に、現実の重みに耐え切れなくなったり、友達の思いとの間で揺さぶられたりすることで、今まで見ることがなかったようなその

子らしい一面が表出することもある。そんな時子どもたちは、互いに自らの論理を前面に出し、生き方にまでふれていく姿を見せる。お互いの論理に働きかける力が強ければ強いほど、自分とは違う論理に矛盾や葛藤をかかえ、子どもたちは、自らの追究を自分自身の内で見つめ直さざるを得なくなるだろう。見つめ直した先には、自分自身が追究をふり返り、その子自身が学びを自覚していくことにもつながっていく。

学校での学びとは、教科における認知を追究の中心におきながらも、どこかで事象や友達に働きかけることで、子ども同士が影響を受け合っているところに特徴がある。教師は、まずその子が見つめている認知は何なのか、その子の追究の対象への立ち向かい方や友達への働きかけ方のもとになっていることは何かをとらえていく。子どもをとらえていく中で、教師の願いを明らかにし、今まで見過ごしていたような何気ない表れにまで目を向け友達の論理にふれる場を意図的に設定することが大切である。その子に、誰のどんな見方や感じ方、考え方を出会わせるのか。そうすることによって、その子に何を期待するのか。教師は、その子と友達とがお互いの論理を響かせている場面での、その子の今をとらえ、その子への願いをより具体的にすることで、一層柔軟に関わっていくことができる。

このように、その子の追究の軸となる認知と情意とを常に結びつけながら、その子の論理と友達の論理の絡み合いを構想することが、その子ならではの学びを支えることになるのである。

(2)「とらえ・願い・関わり」からその教師の内面に迫り、教師の学びを探る

その子ならではの学びを追究していく中で、教師は子どもたちの学びを支えるために何ができるのか。

子どもの思いを常にとらえていこうとする教師は、時に構想にはない子どもの表れに驚き、新たな発見をしたり、その子の追究をどう支えればいいのか迷ったりしてしまうことがある。そこでは「そう関わる自分はその子をどうとらえていたのか」「その願いでよいのか」「なぜそう関わったのか」と子どもの姿を鏡にその教師は、自らを見つめ、その子への「とらえ・願い・関わり」を研ぎすませていく。それは、その子との関係において、子どもとその教師自身とを行き来しながら、自分自身をふり返っていると言ってもいい。子どもを自分なりにとらえられた例を、他の教師が自分のクラスにあてはめようとしても、同じようにできるはずがない。それは、その子たちとその教師がつくりあげてきた営みがあってこそ生きてくるからだ。こうした営みの中で、私たち教師がどう営みを築いているのかを自分自身に問いかけていくことによって、自らの内面に迫っていく。

ひとりひとりの子どもが違うように、私たち教師もまた、個々の生育歴やこれまでの経験がひとりひとり異なる。同じ子どもの表れに対する、見方や感じ方、考え方には差異がある。当然その子に対する関わりも教師によって違ってくる。お互いに違うからこそ私たちひとりひとり子どもの姿を鏡にして、自分の心のあり様や生き方を見つめ直さざるを得なくなる。こうして私たちは、お互いの内面に踏み込んで行く必要性を感じている。なぜなら、他の教師との差異に自らの内面を見つめ直し、「自分は」と自ら問いかけることが自分自身を探していくことになるからである。こんな思いをもつ教師同士が赤裸々に自分の内面を語り合うことで、「なぜそう願うのか」「自分ならこうとらえる」と教師の心情面にまで話を広げている。一人の教師の内面に迫っていくことによって、そこに「何が起きているのか」「事象に何をみているのか」と周りにいる教師同士が影響を受け合い、自らをふり返ることになる。教師も一人の人間として、お互いの価値観や教育観に差異を感じ、「自分は」と自らの子どもへの見方や感じ方、考え方を見つめ直していくことに価値がある。したがって、教師にできることは、その子との営みの中で、自らの「とらえ・願い・関わり」を研ぎすませていくことである。

子どもの成長を願う教師同士だからこそ、相互に人として成長し続けることを可能にする。そのことが、一人の教師の学びが他の教師の学びに影響を与え、お互いに影響を及ぼし合い、再び自分にかえてくることで、教師が自分らしくなっていくのである。

子どもと共に学び続けようとしていることを大切にしている教師ならば、子どもの表れを懐深く受けとめ、常に新鮮な目で子どもをとらえ続けていくことができる。子どもの姿を鏡に教師が自らの学びを考える先には、子どもと教師が、学校で学ぶ意義を明らかにしていく様が見えるであろう。子どもたちと共に学び続けていくことは、学びの共同体としての学校そのもののあり方を問うための私たちの姿勢でもある。